《書評》 Victor Segalen, *René Leys — Édition complète*,

édition présentée, établie et annotée par Sophie Labatut,
Préface de Michel Butor,
Editions Chatelain-Julien, 1999.

木　下　　誠

ヴィクトル・セガレン（1878～1919年）の死後70年にあたる1999年のフランスは，研究者からマスコミまでセガレンについての多くの言葉が飛び交った年だった。まず，秋から冬にかけて，パリのフランス国立図書館リシュリュー旧館で，モーリセット・ベルヌの手によって整理の完了した手稿や書簡，ノート類，セガレン自身が中国で撮影した写真等を展示した大規模な展覧会が開催され，12月16～17日には同図書館のトルビヤック新館でフランス内外の研究者（Henry Bouillier, Mauricette Berne, Christian Doumet, Eliane Formentelli, Noël Cordonier, Marie Dollé らのセガレン研究者に加え，彼に関りのあったゴーギャン，ドビュッシー，ニーチェ，リルケ，ランボー，クローデル，サン=ジョン=ペルス，ギュスターヴ・モロー，マティス，植民地文学などの研究家総勢20名近くによる発表）を集めて二日間にわたる公開シンポジウム（第一日「ヴィクトル・セガレンとその時代の作家たち」，第二日「ヴィクトル・セガレンと芸術」）も開かれ，多くの市民・学生・研究者が訪れて，セガレンについて多彩な議論を交わした。これを機に，同展覧会の豪華で内容の濃いカタログ（*Victor Segalen voyageur et visionnaire*, Bibliothèque Nationale de France, 1999）を初め多くのセガレンの作品の再刊や研究書の出版がなされ，「ル・モンド」や「リベラシオン」などの新聞，「ヌーヴェル・オプセルヴァトゥール」や「マガジン・リテレール」などの雑誌がセガレンを大きく取り上げた。また，彼の代表詩集『碑』（*Stèles*）がヴォルテールやモリエールなどとともに2000年の教授資格試験（アグレガシオン）のプログラムに指定されたことは，このセガレンの露出に拍車をかけ，受験者向けの研究書もしくは参考書の類いが書店の棚をにぎわした。

本書は，セガレンをめぐるこうした「喧騒」の中で，最も重厚かつ野心的な一撃を放ったものとして後々まで記憶されることだろう。「重厚」と言うのは，文字通り8㎝にもなるその厚さのことであり，全1345頁を上下巻に分けて堅牢美麗な箱に収めたその姿によって，この本は他を圧倒している。「野心的」だということの理由には説明を要する。まず，この二巻の目次を，その各分量（頁数）とともに書き上げてみよう。

第1巻

緒言3p.／序文（ミシェル・ビュトール）17p.／序論（ソフィ・ラバチュ）87p.／『ルネ・レイス』215p.／文化的・歴史的・文学的注230p.／余白と異文139p.

第2巻

資料　（メモとプラン，完全なファクシミリ付き50p.／「ルネ・レイスに基づく覚書」（第一手稿）抜粋，いくつかの頁のファクシミリ付き71p.／「MR に基づく秘録」完全なファクシミリ付き63p.／「革命」完全なファクシミリ付き109p.／モーリス・ロワの手紙49p.／モーリス・ロワあるいは『ルネ・レイス』に関するセガレンの一般的手紙の抜粋23p.／「神秘の園」6p.／「小説の新しい形式あるいは〈エセー〉の新しい内容について」10p.／『碑』抜粋19p.／袁世凱に関するセガレンの記事「中華民国大統領の家で」，「袁世凱との会話」26p. ＊各資料は序論・注付き）

付録　（ジャン・ロード著『新中国』あるいは V. セガレンの同時代人の見た中国23p.／『ルネ・レイス』年表—小説の日付一覧表10p.／1911年の出来事の年表，「ル・タン」紙抜粋付き20p.／中国諸王朝年表—清朝歴代皇帝譜6p.／ヴィクトル・セガレン略年譜9p.／書誌12p.／人物名語彙集35p.）

謝辞／写真クレジット

一見して明らかなように，ここには，『ルネ・レイス』という作品をとりまく，ほとんどありとあらゆるテクストが収められている。

第一巻は，ソフィ・ラバチュが国立図書館に所蔵されている『ルネ・レイス』の手稿（第一手稿である「ルネ・レイスに基づく覚書」と区別して第二手稿と呼び習わされている）を新たに校訂し直したテクストと，それを上回る分量の百科全書的注解（そこには，『ルネ・レイス』の物語が展開する1910年前後の中国のさまざまな歴史的事件に関する説明，フランス人を初めとする西洋人や日本人の租界生活の事情，中国の自然，文物，習俗，建築，文化的背景，文学的素養，音楽，宗教，地名の由来，セガレンとルネ・レイスのモデルとなったモーリス・ロワ（Maurice Roy）の具体的行動などが，大量の写真，図版，地図等を交えて詳細に語られている），さらに，セガレンが1916年に一旦清書した『ルネ・レイス』の手稿の行間と余白に死の直前まで書き込み続けた異文・付記・メモ・図・押印などを復元したものを「異文と余白」にまとめ，『ルネ・レイス』という作品自体を余すところなく鑑賞させようとしている。「余すところなく」というのは，まず，セガレン自身の『ルネ・レイス』という作品への最終的意志をテクスト確定のレヴェルで最大限に尊重し，さらに，手稿にセガレン自身が書き込んだあらゆる情報を読者に明らかにし，テクスト確定の正当性を主張すると同時に読者もこのテクスト確定の作業に参加できるように保証し，最後に，作品そのものの舞台背景についての知識を持たない読者のためにソフィ・ラバチュの詳細な調査の成果を開示して，読者が自ら調べる労を省いたということである。この最後の（本の中では二番目の）注は，それだけでも，20世紀初頭の中国の社会と文化を知るためのすぐれた案内書として読むことができる。

第二巻は，『ルネ・レイス』に対するセガレン自身によるあらゆる先行テクストを「資料」として収め，さらにそれ以外の——セガレンの手によらぬ——参考テクストを「付録」としてまとめたものである。「資料」の順序は，最終手稿である『ルネ・レイス』に近いものから遠いもの

の順で，1910年３月に北京に居を構えた二ヵ月後に謎のフランス人青年モーリス・ロワと出会ったことに端を発する『ルネ・レイス』の作品生成の物語をたどるにはやや不便である。年代順に言うと，「MR に基づく秘録」（1910年６月～1911年10月），「モーリス・ロワの手紙」（1911年３月～11月），「革命」（1911年10月～1912年１月），「ルネ・レイスに基づく覚書」（1913年11月～1914年１月），「メモとプラン」（1913年から1916年まで断続的に）というのが1916年の『ルネ・レイス』第二手稿に至るまでの主要なラインである（残りのものは，この主要ラインに流れ込む補助ラインと言うべきもので，そこには，セガレンが1909年６月に初めて中国に行き，８月から翌1910年の２月末までジルベール・ド・ヴォワザンとともに六千キロにわたる中国内陸部さらには日本にまで至る旅の最後に書いた短い小説ジャンル論「小説の新しい形式あるいは〈エセー〉の新しい内容について」，詩集『碑』のうち『ルネ・レイス』に関係があるとソフィ・ラバチュの判断した詩篇10篇，セガレンがその長男の主治医をしたことから知りあった袁世凱についての記事２篇，「想像のもの（イマジネール）」と題された手稿群の中の一篇でモーリス・ロワのあだ名「神秘の園」をタイトルとしたもの，妻や友人たちに宛てたセガレンの手紙などであるが，ここではそれらには触れない）。これらのうち，「革命」と「メモとプラン」，「レネ・レイスに基づく覚書」は，ソフィ・ラバチュが初めて活字にしたもので，セガレン研究にとってその意義はきわめて大きい。また，他のものについても，「MR に基づく秘録」だけは，1995年に初めて出版された二巻本の『セガレン全集』（*Œuvres complètes*, édition établie et présentée par Henry Bouillier, Robert Laffont, collection Bouquins, 1995）によって容易によむことができるが，「モーリス・ロワの手紙」は1975年に北京のラザリスト教会印刷局から Song-Tche-Hien の序文を付してわずかに81部が出版されたにすぎず（Maurice Roy (René Leys), *Lettres à Victor Segalen*, Pei-King, sur les Presses des Lazaristes, 1975），現在では入手困難であった（ちなみに筆者は，それを，数年前にパリの古書店で偶然見つけ，750フランで入手した）。これらも含め，ソフィ・ラバチュが本書のためにセガレンの手稿をすべて新たに校訂し直して出版したことによって，今後のセガレン研究に格段の進歩が期待できる。ただ，「ルネ・レイスに基づく覚書」に関しては，『ルネ・レイス』の直接の先行テクストであるにもかかわらず，国立図書館にある435枚の手稿のうち80枚しか収められていない。清書原稿ではなく，余白に多くの書き込みがあるうえに，さまざまな略字や記号によって書かれたこの原稿を解読する作業は膨大なもので，書物上でこれを再現することの困難は想像できるが，『ルネ・レイス』の生成過程に興味がある者にとって，ソフィ・ラバチュがこれを発表しなかったことは残念である。残念であるどころか，これは『ルネ・レイス』の「進化」の過程に大きく開いたミッシング・リンクのようで，生成過程の探求にとって致命的な欠陥である。彼女自身は，自分の仕事は「テスクト生成研究の大学的作業」ではなく，そうした生成研究はすでに1997年にマドレーヌ・ミショーがソルボンヌに提出した博士論文（Thèse de Madame Madeleine Micheau, « Genèse de *René Leys* », effectuée sous la direction d'Henry Bouillier, et soutenue à Paris IV-Sorbonne en juin 1997）があるのでそちらを参照してもらいたい（本書123頁，797頁，799頁）と逃げを打っているが，Édition complète と銘打つからにはそこまで徹底すべきだっただろう。

これらのすべてについて触れる余裕はないので，本書第二巻に収められた「MR に基づく秘録」と「革命」の簡単な紹介と，第一巻の『ルネ・レイス』のテクスト校訂について述べることにする。

まず，「MR に基づく秘録」と「革命」で語られるモーリス・ロワ（以下，MR と略す）について。セガレンは，1910年５月末に MR と出会い，北京の郵便局長に赴任した父親に連れられて15歳の時から中国に暮らし，中国語を完全に自由に話し，紫禁城の内情にどのヨーロッパ人よりも通じたこの青年からの情報は，中国到着直後から自らが構想していた1908年に謎の死を遂げた光緒帝の物語『天子』（*Fils du Ciel*）の執筆の助けとなると考え，６月14日から彼に聞いた話や彼との会話などを，自分の考察を交えつつ，「MR に基づく秘録」(Annales secrètes d'après MR, 以下「秘録」と略す）として書き留め始める。この「秘録」は，1911年１月，セガレンが満州で発生したペストの南下を阻止するために北京を離れて万里の長城の途切れる山海関に赴き，その後，５月，天津の帝国医学院（インペリアル・メデイカル・カレッジ）に教鞭を執るために転居してからも，たびたび北京に戻っての MR との会話や手紙のやり取りを通して，書き続けられるが，10月10日に始まった辛亥革命を避けるために MR が上海に移ったことで，10月30日の記述を最後に終わる。MR についてのセガレンの記述は，その後，辛亥革命についてさまざまな情報（新聞の切り抜き，伝聞，手紙）をコピーして，あるいはそのまま貼り付けて集めると同時に，「中国革命」についての考察を加えた一冊のノート「革命」(Révolution）の中に現れる。このノートは，1911年（辛亥年）10月10日から11日にかけての夜に反乱軍が中国南部の武昌で蜂起し，ただちに周辺諸県に革命が広がって，瞬く間に12もの省都が清朝の支配を脱し，新たに清朝に起用された袁世凱総理大臣と南京で中華民国（共和国）を成立させた革命派の孫文との間の妥協によって清朝皇帝溥儀の退位と袁世凱を大統領とする共和制樹立が約束され，翌1912年２月12日に秦の始皇帝以来の王朝支配に幕が下ろされるまでの一連の歴史的事件（辛亥革命）のうち，とりわけ10月と11月の出来事について触れたもので，錯綜するさまざまな情報とその解釈，その中で混乱するフランス人たちの姿を伝えるとともに，他の情報と矛盾する MR の話やその荒唐無稽な提案（セガレンに対して，皇太后すなわち光緒帝の未亡人をフランス公使館にかくまう手だてや，200丁のモーゼル銃の調達を求めるものもある）を，先の「秘録」と同様にセガレン自身の考察を交えながら記している。

「秘録」と「革命」に描かれた中国の「現実」は，二千年の王朝の崩壊と辛亥革命を間近で体験したセガレンという人物による中国現代史の第一級の資料としても読むことができるが，単なる歴史の証言には終わらない。MR の伝える話は「事実」なのか「虚偽」なのか？　それ以前に「事実」とは何で，「虚偽」とは何なのか？　ここでのセガレンの関心は「事実」あるいは「虚偽」そのものよりもむしろ，「事実」と「虚偽」の関係，〈現実のもの〉le Réel と〈想像のもの〉l'Imaginaire との衝突が生み出す緊張と味わい（これをセガレンは〈エグゾティスム〉Exotisme と名付けた）にあるかのようである。実際，「秘録」も「革命」も，MR のもたらす情報と，他の人間や新聞からの情報を等しく配置して，それらに対するセガレン自身の分析と考察を加えることによって，「事実」とは何で「虚偽」とは何かを追求するプロセスそのものを明らかにするが，最終的にはセガレンはその「事実」も「虚偽」も両方とも宙づりにする。正確に言うと，「秘録」

においては，最初，『天子』執筆のための優秀なインフォーマントの情報として，MR の伝える紫禁城内部の宮廷生活に関する詳細な話を，セガレンはただ興奮して書き写し，考察を加えるだけであったが，やがて，MR のあまりにも内情をよく知る話しぶりに疑問を感じ始め，次第にセガレンの関心は MR がいかにしてそれを知ったかに移ってゆく。一例を挙げると，ある日，MR は，自分は生前の光緒帝と親しく，彼が紫禁城内部の宮殿の庭で女たちと鬼ごっこをするのもよく傍で目にしたと告白するが，西太后によって幽閉状態にされほとんど誰も近づくことのできなかった光緒帝になぜ彼は接触できたのか。MR は「それは僕の秘密だ」とだけ答え，その理由を言わない。セガレンはさまざまな理由を考え，検討してゆく。MR は西太后の秘密警察のスパイだったのではないのか，あるいは彼は光緒帝に女——それも中国人や韃靼人ではなく，ヨーロッパ人の女——を調達していたのではないか，それとも，ひょっとして，彼自身が光緒帝と同性愛の関係にあったのではないか？　若く，ハンサムな MR を考えると，最後の説が最もありそうな理由だとセガレンは推測するが，この日を境として，MR の伝える紫禁城内部の探索よりもむしろ MR 自身の謎の探求へと変わってゆく。光緒帝の未亡人と MR との度重なる密会，MR の愛人である未亡人の妊娠と出産，秘密警察のメンバーとしての MR の行動……セガレンは，MR の伝えるこれらの話を，疑いつつも真偽は問わず，次々と書き留めてゆく。MR は「真実」を話しているのか，それともセガレンの気に入るように脚色して，「虚偽」を話しているのか。セガレンはそれを追求するよりもむしろ，MR の語りの話としての「本当らしさ」という物語の論理に身を委ねる方を選ぶのである。このことは，「革命」についても言えることであり，MR がセガレンに皇太后をフランス公使館に匿うよう要請したのは，セガレンが光緒帝に対して前々から異常なまでの関心を抱いていたことを知ってのことであり，モーゼル銃の調達の依頼は，セガレンが心酔していたランボーのエチオピアでの武器取引の話を類推させる。少なくともセガレンにはそう感じられたにちがいない。MR はセガレンの欲望のままにこれらの奇想天外な話を作り出したのではないのか。MR の行動はセガレンの夢の住処である北京の中にセガレンが描いたもう一つの夢だったのではないのか。真偽は不明のまま，「革命」の記述は終わる。

「事実」（現実のもの）の探求からそれを語る者と聞く者の欲望（想像のもの）の探求，あるいは「事実」と「虚偽」の間での物語の「本当らしさ」の探求への変化というこの構造は，『ルネ・レイス』において，さらに綿密に計算された筋立ての中でその中心的な構造として再び見出されることになるもので，「秘録」と「革命」はそれを——セガレンの言葉で言うなら——「胚芽」の状態で保存している。『ルネ・レイス』とこの「秘録」—「革命」を合せ読むならば，セガレンの作品の「胚芽」がどのように『ルネ・レイス』という「作品」へと変容していったかの秘密を解き明かすことができることは言うまでもない。だが，それにとどまらず，ついに到達しえない「事実」と「虚偽」，あるいは「虚偽」と「事実」の間，〈想像のもの〉と〈現実のもの〉との衝突の間で永久に未知のものにとどまる「存在」というセガレンの多くの作品——『羈旅』，『碑』，『天子』など——を通底する主題の「胚芽」もまた，「秘録」—「革命」の中に見出すことは可能である。その意味でも，これらの資料が本書に収められたことの意義は大きいと言えるだろう。

次に，『ルネ・レイス』のテクストについて見てゆこう。ロベール・ラフォン書店〈ブカン〉

叢書の『セガレン全集』（前出）に収められたものにせよ，それ以前に「決定版」として普及していたガリマール書店の〈イマジネール〉叢書のもの（*René Leys — version définitive*, Gallimard, collection l'Imaginaire, 1978; 叢書に入る前は同一の版で Gallimard, collection Blanche, 1971）にせよ，これまでの『ルネ・レイス』のテクストは，セガレンの死の三年後，残された原稿を友人のジャン・ラルティーグが校訂し，セガレンの親しかったパリのジョルジュ・クレス書店が出版した版（*René Leÿs*, Texte établi par Jean Lartigue, George Crès, 1922）に基づいている。ラルティーグはもちろん第二手稿を元に校訂したが，それには，手稿への忠実性という点でいくつかの問題がある。ソフィ・ラバチュによる本書「序論」での指摘と，本書と同じ時期に同じく第二手稿に基づいて新校訂版を出版したマリー・ドレとクリスチャン・ドゥメ（Victor Segalen, *René Leys*, édition présentée et annotée par Marie Dollé et Christian Doumet, Le Livre de poche, 1999）による指摘をもとに，このクレス版の問題点をまとめると，以下のようになる。

まず第一に，日記体で書かれた『ルネ・レイス』の日付について，セガレンの原稿では最初に記された「一九一一年三月二十日」を除きすべて「X...」となっていたのを，ジャン・ラルティーグがその中で語られる歴史上の事件や出来事などの内容に合わせて計算した日付に変え，最初の日付も，それらの内容から逆算し，セガレンの記述を無視して「一九一一年二月二十八日」に書き直した。また，この日付の「確定」の際に，セガレンが元々二つに分けて書いていた部分を一つにまとめて一日分の記述にしたり，逆に，一日分として書かれていたものを分けて二日分にしたりもしている。第二にセガレンの独自の筆記法——ティレ，中断符，ポワン，ヴィルギュル，ドゥー・ポワン，感嘆符などの句読点の独自の使い方，「大文字のいささかアナーキーな使用」（ラバチュ），ネオロジスム，独自の中国語表記法など——に修正を加え，これを読みやすいフランス語に標準化した。第三に，セガレンの手稿に見られる構文上もしくは文体上の「誤り」（例えば，繰り返しなど）を正し，極端な場合には，いくつかのパサージュを削除までしている。第四に，セガレンが同語や同音を含む語の反復を避けるために語に下線を施した部分をすべて機械的にイタリック体に印刷した。これらの下線は，別の語に変えることを意図してセガレンが付けた印にすぎず，ソフィ・ラバチュによれば，強調の意味での下線は『ルネ・レイス』に関するかぎりほとんど存在しないということである。第五に，上記の下線と同様，セガレンの手稿には，さまざまな未決定の部分が残されており，清書時に書いた語を，「ペン，鉛筆，色鉛筆」で消して別の語に置き換えたり（異文），消さずに別の語を併記したり（未決定）と，彼は死の直前まで原稿に手を入れ続けた。ラルティーグはこれを，あたかも，セガレン自身による決定稿が存在したかのように扱って，異文については触れず，未決定の部分は独断で決定してテクストを確定した。この他にも，ソフィ・ラバチュは，語り手すなわち日記の書き手の介入を示す（　）と作者セガレンの注記を示す［　］の使い分けをラルティーグが無視していることなどを指摘している。

最後の第五点目は，完成された作品を出版することをまず目指したラルティーグの立場を考えれば非難すべきことではないとも言えるが，他の四点は，親友の善意によるものであったにせよ，改竄と批判されても仕方がない。第一点目の日付の問題は，フランスを初め列強による清朝との

交渉の行動や辛亥革命などの現実に起きた出来事を背景にしつつも，語り手が北京で出会った謎の人物ルネ・レイスの言動の真偽を探りつつ探偵小説のパロディの形式の枠組みの中で，決して到達しえない紫禁城を中心とした北京の迷宮を，紫禁城に自由に出入りできると自称するルネ・レイスの言動に導かれてさまよう主人公の夢と欲望を記述する一種の哲学的・詩的・認識論的な「小説の小説」ともいうべきこの作品の性格からして，歴史的事実に基づいた日付を曖昧にすることこそがセガレンの意図だったと考えるべきである。十年前に同じ中国で，義和団事件という歴史的事件をもとに，そこに海軍士官として鎮圧のために赴いていたピエール・ロティの書いた『北京最後の日々』(Pierre, Loti, *Les Derniers jours de Pékin*, 1902) が，日付と場所を付した典型的な旅行記の体裁を採っていたことを，セガレンはもちろん「疑わしく，虚しいもの」として意識していたに違いない。「私はいつでも疑わしく，虚しいものと見なしてきた，冒険物語や旅行記，旅程表に記された日付にそって，はっきりと定まった場所で，確かに行ったと断言された行為を語る——真摯な言葉で膨らんだ——無駄話，そうした類の物語を」(『羈旅』冒頭の一句，拙訳，『〈エグゾティスム〉に関する試論／羈旅』，現代企画室，1995年，9頁) と，後にセガレンの書く通りである。第二点と第三点は，文体上の特性に関わることであるがゆえに最も問題が大きいと，マリー・ドレとクリスチャン・ドゥメは述べている。彼らによれば，句読点の特異な使用は，19世紀末の多くの作家が革新を試みた領域であり，とりわけ，セガレンの句読点はマラルメの影響を受けたところが見られるが，ドゥー・ポワンの連続的使用や予期せぬ場所でのヴィルギュの使用などは，文に通常とは異なるごつごつとした質感を与えることで読者の注意を喚起する意味があり，ティレによるポワンの代用（これはフロベールに想を得たと考えられる）や感嘆符の多用は，「日記」に興奮の中で体験した物語の外観を与えるのに役立っている。ソフィ・ラバチュも，ドゥー・ポワンの継起的使用は，行為の熱気や力動感を伝えるのに効果的であると指摘している。

いずれにせよ，テクスト・クリティックのレヴェルでクレス版が抱えていた多くの問題を解決し，セガレンが最終的に書き残したものにこの上なく忠実な版をこうして出版したことは，ソフィ・ラバチュの本書における最大の功績である。日記体で語られる『ルネ・レイス』の物語が，日記を書く虚構の「私」のレヴェルにおいて「小説の小説」あるいは「小説」——『天子』という小説とルネ・レイスについての小説——の不可能性についての「小説」という様相をとるのに加えて，さらにそれを書く作者セガレンのレヴェルから見るならば「手稿」の手稿という様相も持つだけに，句読点や大文字などの筆記法を正確に再現したテクストと異文をすべて合わせて出版することは，われわれ読者がその「手稿」の錯綜した森の中に分け入り，その成立のプロセスを探求するために不可欠な作業であると言えるだろう。

本書は，マリー・ドレとクリスチャン・ドゥメによるリーヴル・ド・ポッシュ版の『ルネ・レイス』とともに，フランス国立図書館に収められたセガレンの手稿を綿密に読み解いた最初の成果である。今後セガレンの他の作品についても，手稿に忠実に基づいた版の出版がなされ，セガレン研究は新しい段階に入ることだろう。実際，本書を出版したシャトラン=ジュリアン書店は，『記憶なき民』(*Les Immémoriaux*) と『中国，偉大なる彫像』(*Chine. La Grandes statuaire*) の手稿に基づいた新しい版の出版を予告している（同書店のホーム・ページ

http://www.editions.chatelain-julien.com を参照)。セガレンが生前に出版した書物は『記憶なき民』,『碑』,『絵画』の三作品のみで，それ以外のものはすべて死後出版のため，テクスト校訂におけるセガレンの最終的意志の尊重という点では，問題がなかったわけではない。1995年の〈ブカン〉叢書の『セガレン全集』も，過去に出版されたものを集めただけで，手稿をもとに校訂し直したものではなかった。本書が，厳密なテクスト校訂に基づいた新たな全集に向けての第一歩となることが望まれる。

付記1　ソフィ・ラバチュは，今年，本書の廉価版として，ガリマール書店から『ルネ・レイス』を出版した（Victor Segalen, *René Leys*, Éditions de Sophie Labatut, Gallimard, collection Folio classique, 2000)。これは，シャトラン=ジュリアン版の『ルネ・レイス——完全版』から注と資料，付録のほとんどを取り除いたものだが，同時に「異文と余白」まですべて削除されてしまっている。マリー・ドレとクリスチャン・ドゥメによるリーヴル・ド・ポッシュ版は，このフォリオ版の約三分の二のページ数であるにもかかわらず，脚注に異文をすべて盛り込む工夫をしていることと比べると，ソフィ・ラバチュのフォリオ版は見劣りがすると言わざるをえない。

付記2　『ルネ・レイス』は，今秋，水声社から刊行開始予定の『セガレン著作集』全8巻の第一回刊行本として，黒川修司氏の翻訳で出版される。この翻訳は1999年の二つの新校訂版の成果を生かしたものであると同時に，付録として「MRに基づく秘録」，セガレンの手紙のいくつかも合わせて訳したものである。興味のある方はぜひお読みいただきたい。